

# カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Muhammad Tariq Yousuf Khan  
出身地：パキスタン・カラチ  
所属：Assistant Professor of Economics  
Education Department, Government of Sindh,  
Karachi, Pakistan  
日本滞在：2008年4月～10月

## 二度目の日本

タリク・カーン

私は過去二度、日本に住んだ経験がある。

最初は、仙台の大学の博士課程で四年過ごし、その後、一旦、母国パキスタンに帰国したが、ポストドク研究員の機会を得て、再び仙台で一年過ごした。よって今回のアジケンでの滞在が三回目の日本での生活となった。私の三人の子供のうち、上の娘二人は仙台で生まれ、またその間に博士号を取得するなど、常に私の日本での滞在は充実したものであった。今回も六カ月間という短い滞在ではあったが、恵まれた研究環境の中で幾つかの論文を書き上げ、生産的な日々を過ごすことができた。

さて、今回は、仙台ではなくマクハリという東京に近い町での生活となったが、日本ではどこにいても快適に過ごすことができるということを改めて認識した。特に過去二度の滞在経験により、今回のマクハリ滞在は、これまでになく快適なものであった。アジケンのスタッフにはよくしてもらったし、また私たちが住むアパートの人たちや娘たちが通う小学校の生徒、親、校長先生や担当の先生方にも言葉では言い表せないほどお世話になった。このようなサポートが無ければ、ガイコクジンが異国で快適に過ごすことはできなかったであろう。たいへん、感謝している。

娘たちは、アパート近くの日本の小学校に毎日通い、多くの友達ができた。彼女たちは日本で生まれたといっても、ほとんど日本語はできない。一方、小学校の友達にはパキスタンの国語であるウルドゥー語がしゃべれる訳でないし、英語も簡単な単語を理解する程度であったと思う。英語と日本語のチャンポンで、果たしてどのようにコミュニケーションが図られていたのだろうか。世界中どこでもそうであると思うが、子供たちのコミュニケーション能力には驚かされる。娘たちは、毎日、学校で友達に会うのを楽しみにしていたし、音楽部の活動にも参加するなど、親よりも忙しかつ有意義な毎日を送っていたようだ。ひよつとすると私よりも日本語が流暢で、より多くの漢字を知っているのではないかと密かに疑っている。

私はアジケンでは研究に没頭するとともに、過去二回の滞在経験を生かし、海外から初めて日本にやってきた客員研究員に日本での生活についてアドバイスをしたり、相談に乗ったりした。特にイスラム圏からの日本への訪問者が戸惑うのが食事である。初めて見る日本の食事が、イスラム教の戒律に則ったもの（ハラール）であるかどうかを彼らに教えるのが、私の大きな役割で

あった。

いろいろ便利な日本であるが、全く不便を感じないわけではなかった。その一例が、公衆電話である。日本に到着した初日、パキスタンの両親に連絡を取ろうと、近くの公衆電話を探したが、なかなか見つからない。携帯電話の普及により、公衆電話が消滅してしまったのか！マクハリ初日ということ地理感覚もなく、自力で探すのは諦めて、通りすがりの男性に公衆電話の在処を尋ねることとした。しかし、彼も公衆電話の場所を知らないという。結局、その男性が別の通行人に尋ねてくれて、マクハリホンゴウ駅周辺にあることを確認してくれた。その後、彼の道案内で駅にたどり着き、ようやく私は公衆電話からパキスタンの両親に電話をすることができたのである。数日後、携帯電話を購入してからは、公衆電話を探す必要はなくなったが、今度、日本に来る頃には、もっと見つけるのが難しくなっているに違いない。

あつという間の三度目の日本滞在であった。研究も、生活も十分に満喫できた。いろんなところでいろんな人と出会うことができた。多分、最も日本を満喫したのは、私の子供たちであろう。

(前海外客員研究員／訳：小田尚也)